

西遊雜記  
卷之三

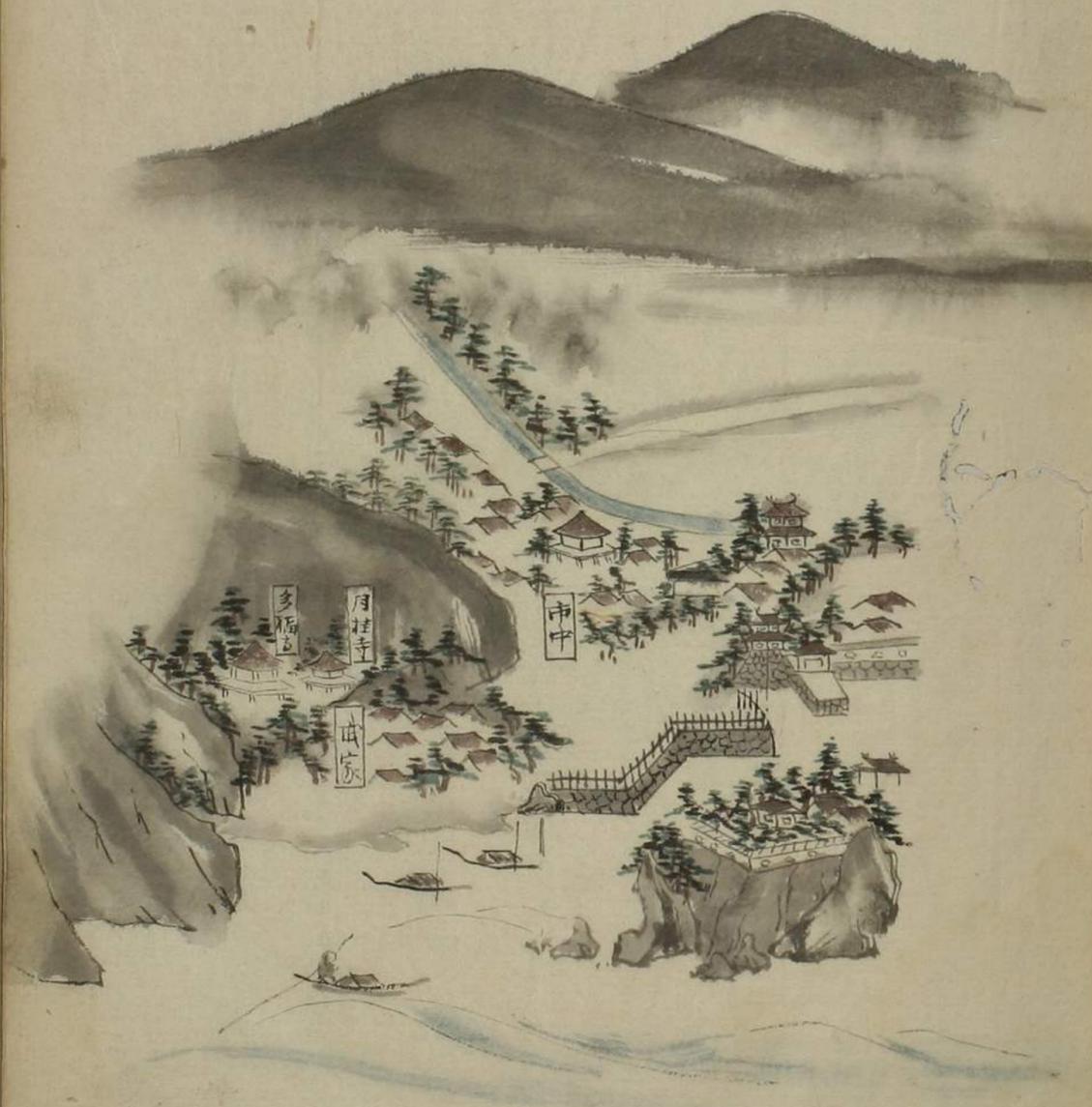
冊數	書名	函號	部類

豊後佐賀之関ヨリ  
大隅加治木一テ之記  
此巻下書破シテ除キテ所多シ

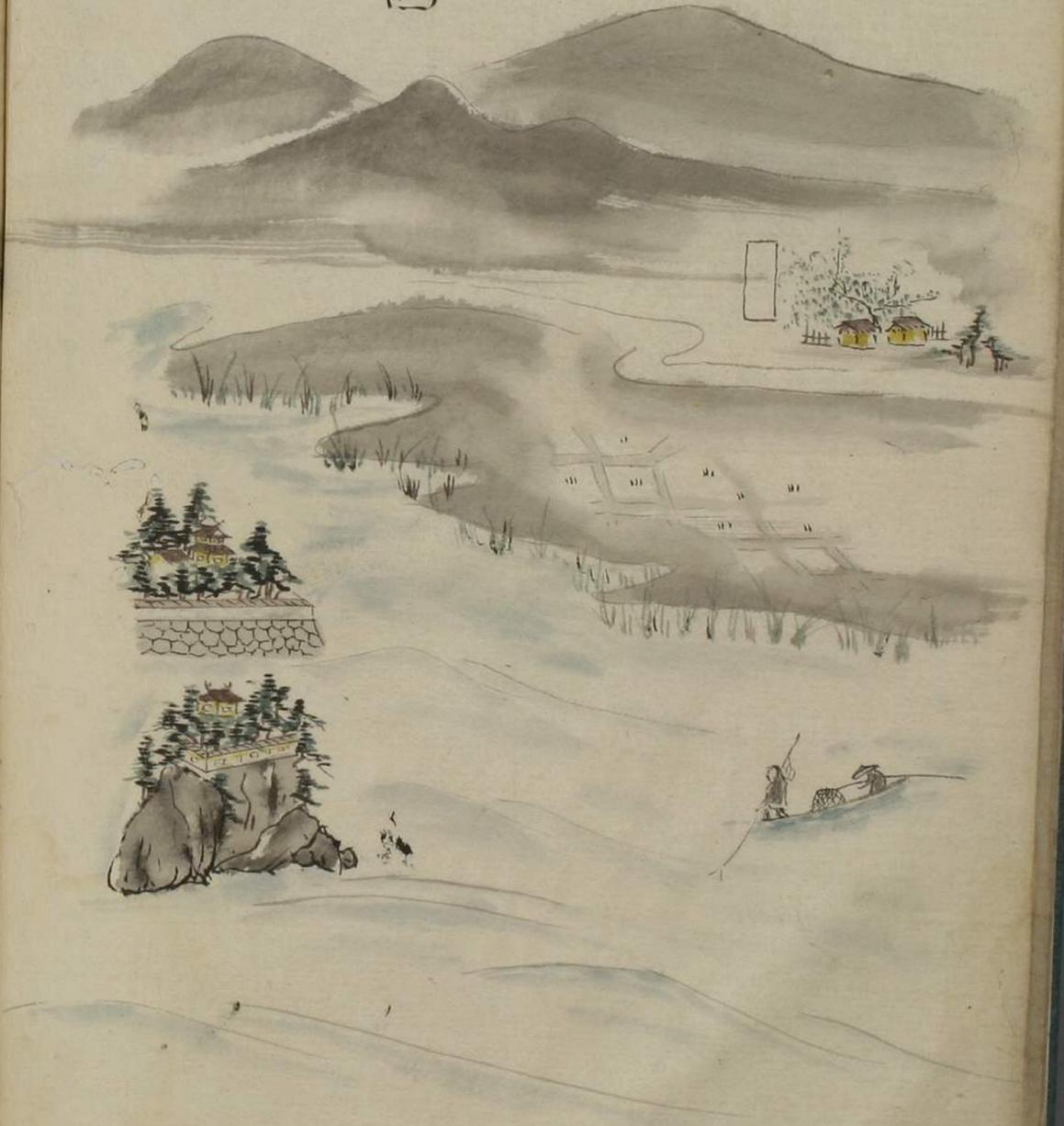
西遊雜記卷之五

古以形草稿  
藤井藏書

初賀利関より印樺城まで舟程七里也之と定之  
らぬ此の廣道も遠し戸次村をこへてふり人之家  
戸次城の所とし之印樺城は昔大友の真名といひ  
しこの事跡よりこしひ天文の頃と唐白木友の居居  
所と宗麟の在居此に居たりといふ事詳小傳  
ハ之より方の書メとて此要言乃此を同宗國の事  
也



西





まゝに流るる風よと船かきこにうらの方の風よゆく  
こつと本とさうし主記ふをまきこつにがしを益  
こしめゆ記に由世にも軍を地理の事い論せしぬ  
の繩より備えまて古戦場の比図となくしつれ  
説こつらのちり古語も天の理を比の理に方な地理を  
人の和にふんしこり知とぬまて天のあやを長将賢  
將のまもりて論かごしはるし地理のまもり自  
足のふんきて大際と能くまこり軍を布し移せる  
人に安がこりも命を地理の事とゆへに地理の  
えらりと論せ人にまて一人の對面せし實の七事書の  
るを論せしりて北越流甲別流をしまと海はもと  
らりて室ふつと西の國を結のまきて信はるが  
は  
印持に月持寺多福寺と淨宗と印持を古語所をり  
多福寺よりそ佛判と移せる字と知はると日本つ  
の佛判を以て字と布はれとけせよとの横持とのを記  
死しては徳業淨ふつと釈伽佛のゆへに切しと列  
そふ称譽しをひせ月にとるまて解しかに記寺  
ろしは也  
印持長長しそと里安しそと持把対しそた牛宿た

此の地をわが町とすべしといふ事ありしかば  
 作物も一少くも入ると山の頂より一歳甲の  
 木も畑に新田多ければ此の利ありゆへに  
 家も一里の方の一家二家ありて人信は  
 心ゆき道とせしむるに困るは日頃の  
 中一及にさす日ひてもさす一山中  
 入りまじとすれども谷に一人も入らざれば  
 狩養ふ事とすりし一人の云は乃深山  
 与の根根と云ふ人ハス一とく  
 此の地をわが町とすべしといふ事あり  
 此の地をわが町とすべしといふ事あり

牛鋏  
長短アリ  
尺七八尺



此所ヨトリテツカフ

此繩ヲ牛ノ尾ニ  
ハカリツケル

鎌



其の不便にして人のしよとて  
 此の地をわが町とすべしといふ事あり  
 此の地をわが町とすべしといふ事あり  
 此の地をわが町とすべしといふ事あり  
 此の地をわが町とすべしといふ事あり

よのふれをたしつらんつとて牛馬にとにふかふか

つくれ給ひ今やしつ事しつたつたつたつたつた

としに記行より固成と二十日の止乃を西

山まの日向年になつて薩摩と申西に何なる

貴後の界より日向の海邊をめぐると薩州麻里

まで曲道百里をめぐると人の物産りに

山長ゆきけく谷川源わくして七月廿八日乃六野

岩せしまをこころに居し

四んてまー旅の持物やせんつあつたはる日

中津の市よりしつたつたのりお知山道は育しつと

に海へ行つてつたつたつと七活伽藍の八寺あり

有智山蓮城寺

観音堂

捕待所

長者ヤニヤ

此所今畑トル

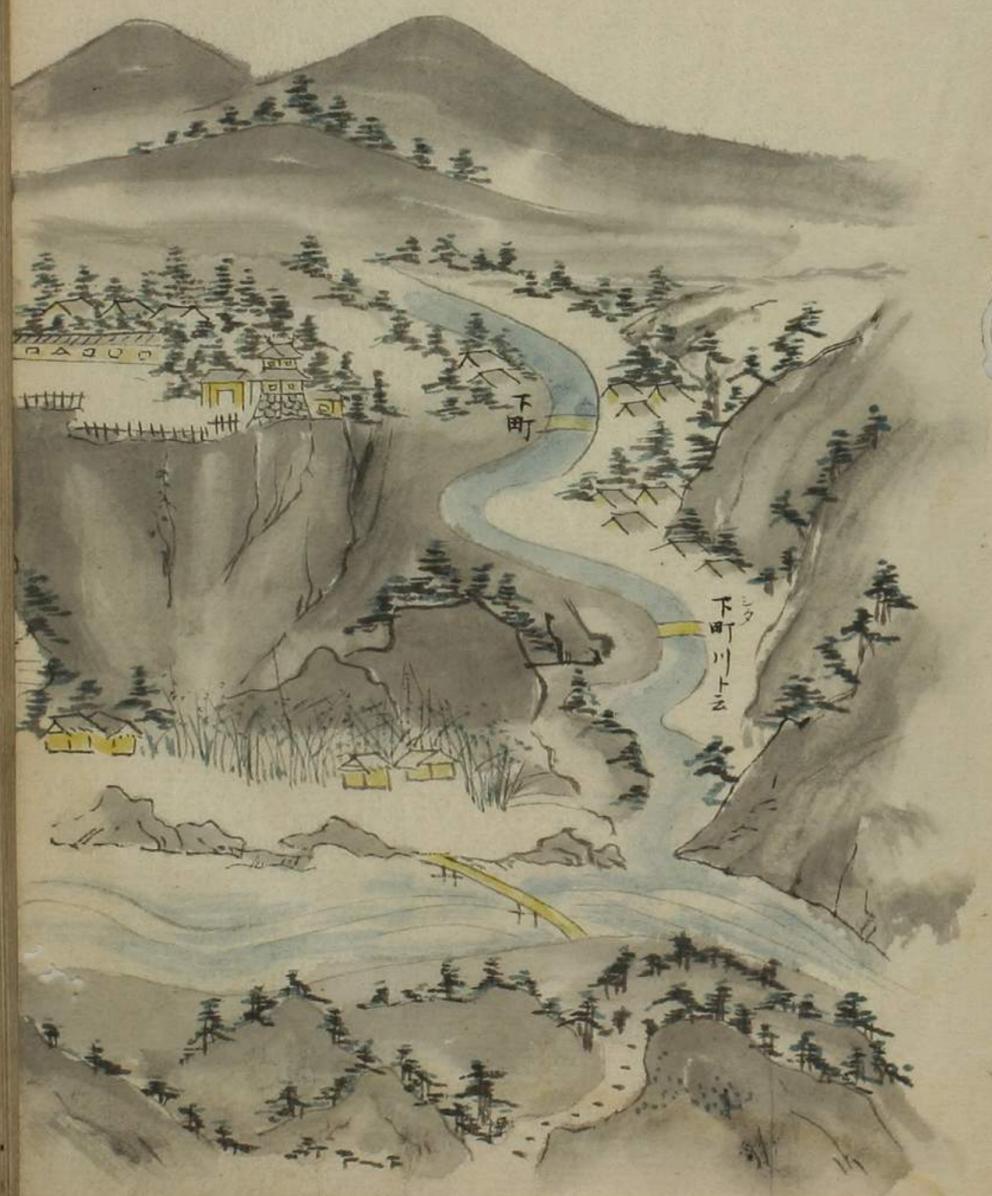


西

以年々天竺の僧達上人の用基として其の長老の  
 徒之伊豫の金山寺に本寺として真之化して其の用明  
 天皇に清字に所記に志地の長老といふ豪家よりして  
 徒之せしむ有る年これに臨所といふ又とせよの娘  
 とありて用明天皇に恋ひ慕ひ泣ひてまゝありて  
 長老の家へ清字よりして本條とありて一く極記は  
 長老の寺より東に長く安に所といふ所の山向の  
 小島をそく一里半をよりてわに小島よりして位傳物清り  
 たり

六月朔日圖に白くく竹田より云南中流に中川候所なり

豊後國  
 岡城之略圖



玉ライト云々  
 半里此口肥後  
 往來ナリ



西

國の海と山と  
 せし海門之險峻の峯々も  
 石にけりしは云々  
 不祥なるけりか  
 石欄石柵といふ  
 崖にけりし橋の  
 流りやまき  
 まねを思ふに  
 とより

雅樹竹のしの子あり新と久足船のの家  
多うて海の傍に昔のし一足あり是より又曲の海  
と嶮あまの傍にせうとく一人の事と書  
しりかゝるの事あらんといひ記す  
しと初にいふ海に今石櫃自記をす  
とのを馬のの流来りあらんといふ  
かあつととと近方と稱して西北のちに  
此の山に  
張く割り  
あつととの物流りあらんといふ  
あつととと粟俣の作知り  
のしりに後記ありしとのまの嶮  
あつととと山の高嶮と記す  
あつとととの曲にあつととと  
しとた今ありとあつととと  
はつととと大嶮と記す  
のり高所と記す  
湖ひが記す  
と記す  
は石より記す  
と記す

とくそ二つにほくねぬのわくも落分ふや右同はれを  
水とて二つとてわくも一流しりくわくも豊後の名産に  
横の糸菓し移わくも菓をいりくも菓をいりくも菓をいり  
佳なりと方海に之影の山なりとの山にりて名り  
かくりりのこ製新能くわくもいり。稀な月也  
圖のこくハ方山を平地し之をこ山の頂地の平な  
り少と方にソク多比の多稀也

けいの酒巻の山とて一に山の十巻と合てのこく  
は常り入レ此中平浦百やあひの山くらは火影と舞りてを  
くはに巻と建一とのもわあ平ぬるるるるるるるるるるる

くは酒巻の山とて一に山の十巻と合てのこく  
全とのけ外人家の湯屋香隠物ままて山の裾を  
穿りてくわくはこく一に代わりのこくもいり  
考ははこ

相傳ふ秀を九別は証成の時跡の山地也くは  
地理とては山越の山なり我大軍とてく責をいり  
薩列十の肥存音け外とて山にまに山にけいりけいり  
入てとて山にりかて一也とて山にまに山にけいりけいり  
称譽ありしやとて山にまに山にけいりけいり  
まんの方言とて山にり説とソク平く産は山にり

日向の勢... 豊後国... 日向の海濱...

世ニアラウセシ板本ノ圖  
日向ノ地甚クキ違ハ  
アル故ニ海辺ノミマ  
圖シ置モノナリ



是ヨリ南ヲ日向灘ト  
稱シ海アラシ東方ハ未  
相對セリ海上ノ里數  
予未詳土人ノ云可余里  
又云四十余里所ヨル故  
ナリ

日向乃乎と西のさ肥厚界を喰止なりなり... 日向の勢... 豊後国... 日向の海濱...

此の地は禪宗を名の一里くろりし多所ノ用事あり  
 て此の禪宗にて多を輸入鼻紙入等と二布の必しに  
 一とてみても事と初ては合ひ一時と目なれり新  
 に合ひ一と目し一回と目し此をゆくの時入  
 ン事と目しに此の地は一家と一家とて上中下  
 に地一と目し此の地は一家と一家とて上中下  
 事と目し此の地は一家と一家とて上中下  
 の所ありとく此の地は一家と一家とて上中下  
 事と目し此の地は一家と一家とて上中下  
 此の地は一家と一家とて上中下  
 北より西に此の地は一家と一家とて上中下



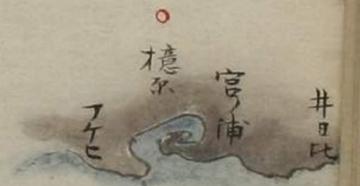
日向灘

檉原之圖

荒川 二里半  
西キリ三  
一里半  
大久保 二里半  
宮内 一里  
加治木  
胎本  
廣野

---

甘カマ 五里  
原野 三  
山 二  
福山 三  
國分





北



此を日記記し記し憶ふを神代の故なる神代  
の旧跡とて國のこゝろ小社敷多を其らの神のまゝ跡以の  
の畷とて津波のびり一落り也其のまゝ跡以の  
をその古史の流より天照神の奥方の序をこそよ  
りよふべしなり賑ひとほひもあはれなりなり  
九別二波はむもそ津波の和とあはれなりなり  
其には日向乃心にたきなりなりやたにく由傳候の人儒の流  
なりとてかく武流とて是の春伯のよ九別の由  
源日向憶ふ所なりなりとそ津波とそ稱しなり  
解言一我日のとちやのあはれなりなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
怪後とほめふかこき俗のいろくも津波あはれ  
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
是のよそし稱せしとそ津波のまどくふの由  
記せしよふれと譽れしなり例に依るとしなり  
是と月れを譽れしなり神代のまどくふなり  
まどくふなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
譽れしなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
かゝるなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
のせしなりなりなりなりなりなりなりなりなり

海向入る海もそに女魚しふ  かくの上は魚をり  
 口のうらむをふしをばく火々か其のちは海に泊る  
 いり河は魚泊計ととりし魚を口のうらむを  
 此のちの魚をりけりま日日記はまをりてのち  
 上のせ中のせりせりてふしを岩をり川の中はま  
 ふ小戸の上の漁中のせりの漁より海にまをりて  
 けりり岩田根を一石とて海向より川上小戸の岩を  
 へん字も世をてふしをかまをりて魚を  
 ろりて漁家ゆりてるゆりてをりて魚をりて  
 津代の流をりてに船はゆりては師石は、井淵  
 字らへ山のしりて流をりてをりて  
 若物津の流のとてゆりてるゆりて

西

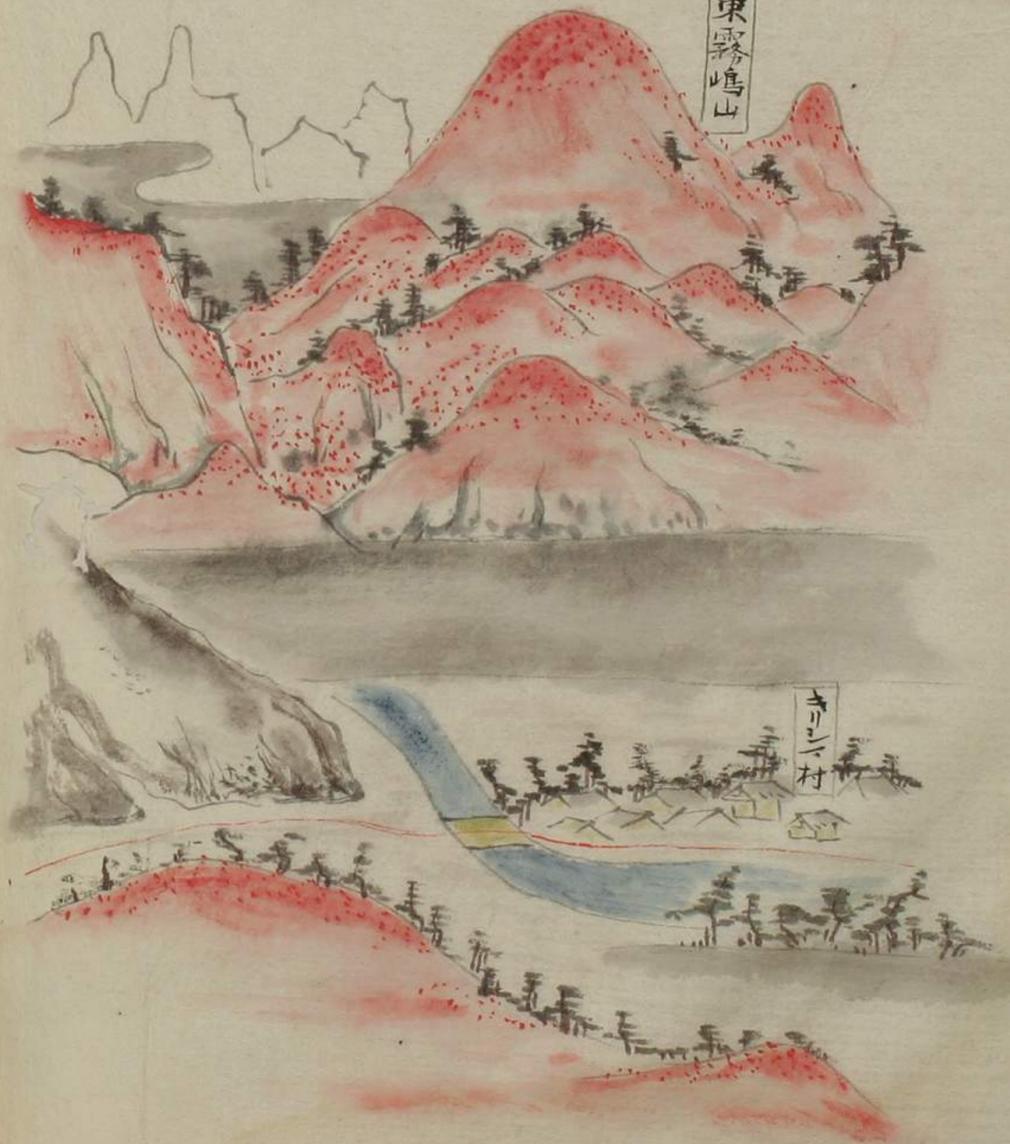
霧嶋山



西霧嶋村

荒川

東霧嶋山



寺三村

霧消止と五列中一乃深山と出谷嶮岨がまうとをせ  
る人稀と小山奥北はの森良山にけし比田人陽に給  
る都中里に連りし山と山と給かうくは布  
比度大くあゝ無かひ山山跡跡の丸粒あふと花の  
以谷く家く移く纏と包と一とく山一面にま  
胡日名山とえまうに之ひてまあににまさん  
とまう其の比と盛るとしてをねう沙都とあり  
てしけ山の跡跡と其まともは谷まうと方節とを  
まうも跡跡と移せる跡跡のふと氏山の名と  
つけしとのとを也系一とくしと山のとし

やしにうりそや山山の跡跡のつらと流に流のとく  
おれとを山とものにはしと山霧消村と西霧消村  
とと曲りたつとひあうりりは程凡と山西北のと  
山く霧消止とをなと山とあうりて山村とく比  
名山乃作名かうりしと山と總名はまうりしと山  
海内世人の思ふと山と山外と山中華の山と山と方  
らうと山と山と山と山と山と山と山と山と山と  
け山奥嶮岨の峯法代と山と山と山と山と山と山と  
山と山と山と山と山と山と山と山と山と山と山と  
津代の文を山と山と山と山と山と山と山と山と山と





此の事... 物... 記...

薩摩候の願... 改... せ... 病... 一... 又...

段に... 一... 又... 一... 一...

是

備中下郡園田村住り

右村住人

年中

一... 外...

一... 人...

右より所記文法波の系は川新田又藤原清福昌寺  
少くも正心精舎の正心寺の御書也。尚書也。  
入る事有るに改定先之波一名今日新田の之波也  
一は系四願の中より母清原世の御書也。御書也。  
之波也。御書也。母清原の御書也。御書也。

何月何日

何日何日

以上年表中

けふ身と止家せんこと所をも年表に記入先に行て  
名也と年表に記入したる世の事と流し  
右より所記入る御書也。御書也。御書也。御書也。  
御書也。御書也。御書也。御書也。御書也。御書也。  
御書也。御書也。御書也。御書也。御書也。御書也。

何月何日

何日何日

西方以上年表中

右より所記して止家一也。御書也。御書也。御書也。  
御書也。御書也。御書也。御書也。御書也。御書也。  
御書也。御書也。御書也。御書也。御書也。御書也。  
御書也。御書也。御書也。御書也。御書也。御書也。  
御書也。御書也。御書也。御書也。御書也。御書也。

今もその昔の事とて遠くは他国者、薩長入る事有る  
かゝる御書也。御書也。御書也。御書也。御書也。御書也。

入つては日盾かせにきり何れをいかにいれりてを  
止法よりそく改才海まをにがかりとつて  
昔所と入るに清田返一をまへしてそを薩州候  
乃傾を入りてを名あつて自由のせまを町場  
とて薩人宿といふ家よりて門に薩人宿とい  
せし大文字の看板とがしをきりて六部と本渡  
十二文とを公氣つて止名とをまへて名にを  
母に交へて十二せんとおまへりていふまへと  
あつて二段のあら人を自う合本と廻りこれ  
名のと部あつてを燦丹に濁とてつて流  
のこりり建たにをれをあつておまへり  
あつてを名とがらつていふく薩波のあ  
せ流しつて安氣つて一薩中より一薩列  
人の志しつていふ人と流り志の流り

その人のあつていふ人と名にをいふ  
六月初日豊後流り日向よりしに止法向き  
あつてを合本あつて一居傍をまへ流くの  
るをいふかしく遠つてらのを告ゆせ  
あつてやうく五段に人隔をいふけあ日向を  
目につくをいふに海中を船にうて是をいふ  
ん中よりあつていふを人物と諸脚く流りて  
人隔の東西狭く南北長に止むを東と日向西と  
薩摩の海北といふつて肥後の求摩郡を  
入るにいふていふにいふて一法をいふて

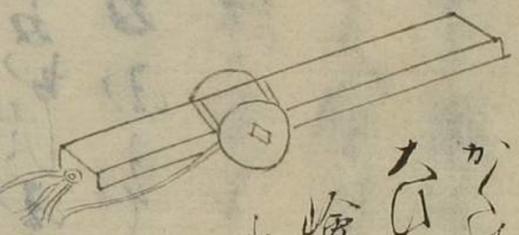
凡糸の比名刺四條しかく康見晴の凡俗一白とて  
人を向く道とて見れば加治木の所はなりて  
止宿せりし所と外泳を径して土家凡二百家  
くろり船の所の所を高家較多くと大隅をい  
申の市中もつ所と見ゆり肥後郡なるなり  
薩州佐津戸小一度はた船と世はなりては  
まろしと大外泳とつ所と見ゆり土家百形あり  
と宅の武家なりとて薩摩界より大隅と見ゆ  
舟の薩摩界の小河川とつ所と見ゆり肥後の  
舟の

は逆船と見ゆり薩摩の改むりて世のな  
りかいたにらるる

日向大隅乃二州とて一家に女馬を定むる例と  
取多むしむる九別と見ゆり女馬の泊と見ゆり  
くおおとて六年毎にらるる薩摩の舟と見ゆり  
田渚りまや洋りはさて馬と見ゆり馬率に男子  
とて人むらり婦人のむらりて女馬と見ゆり  
故一洞を率てまらるる女馬と見ゆり  
あし舟の舟の舟と見ゆり舟の舟と見ゆり  
男子と牛とつらまらるる舟の舟と牛と

川がひろく牛のたす大津の車さーし

かゝるはひの車のうたにいづ  
たひあふはよのせをたの  
嶮まいて牛に  
とるこむはるさるさるさ  
をはるさるさるさ



此畑の牛ノ尻ニ繫テ引スナリ

杓ノカシラニ環ヲ  
ウチテハレニ網ヲ付シ  
テマリ



是レもハやリたん  
滋シりリ地地は  
うててハぬぬ  
けりとハぬぬ  
まままままま

西遊雜記 卷之三終

西遊雜記 卷之四

西遊雜記卷之四

古松軒草稿

加治本浦より根本浦へ舟出りて二里は洲に舟着  
 一の川より大隅薩州の界川なり根本浦より舟出  
 たり此漁家所なり又吾友所居名産烟草をせむと  
 云ふは正序村といふは僅かの村なり一は村の右系  
 村薩州大隅との右系村なり一は村の左系村なり  
 此村より舟出りて舟の惣名一せりといふは此の村に  
 舟出りて舟出りし六月九日險し以白か子坂と云  
 へ鹿見所に入由道以程に里

貝カ夕ヨリ  
 竹村、海上  
 二里戒丁  
 鹿兒嶋ヨリ  
 櫻嶋一里  
 大隅、地ヨリ  
 毛一里

北薩摩子國鹿兒嶋大略之圖



是ヨリ西北ニテ  
 伊集院ト云町  
 行程五里  
 是故ニ伊集院口  
 ト云



薩摩乃國と鎌倉時代の風俗、武家おの  
ゝ志乃法より薩州大隅日向之別に耳余外此と  
稱して言家式と二百家式と百家式と在り  
と定して小源乃古き自耕一、此に古に  
了て月書とて、鹿見治に系勅せり、鹿  
見治乃市中とて、都汝何と稱し、  
圖とて所の鹿見治南北凡廿丁とて、西の  
山連、伊集院とて、所より、中野山  
乃原江と街、右の倉、府里とて、  
に鹿見治に入らり、海とて西の山  
ぎとて、三丁とて、八丁とて、  
校、たて、北乃洞白浪、入  
嶺、上下之里、余所、  
凡とて、鹿見治、  
白浪、  
公人の、  
鹿見治要害の、  
昔時、

鹿見治乃眼申とて、所は、  
曲は、鹿見治の源より、  
そ里、余所、  
白浪、  
公人の、

市法別、  
鹿見治、  
所は、  
白浪、  
公人の、

昔時、

入りし所の東見島より十二里西北河内川に在り  
る所を薩軍のしき支つてかきと上り軍の獲ひつて  
此に徳川家降参にありしよしと云ふをいふ所なり  
鹿田島と云一説よりて大隅北にあり流たはしあか子  
取世のよりし河内徳川家乃古伊集院のより一説は  
岩石乃河内隠岐と云流炮と云く秀を云と云河  
内と云をも尚しは伊集院の逃のい。今伊集院  
のよりし居り岩と隠岐を併して白の川の流に  
よりて鹿見島の入口海と云にわたりと云流は  
伊集院口の太陽といふと河内より東洋艦島と大隅薩  
摩の中央にありて山と云ふ。島と云ふも山と云ふも  
中より薩と云ふよりしはなまら。徳川家多きといふ  
は極衝の舟なりて也の名なり。はなと云ふは  
く島と稱しはなまら流津島なりと云ふなり  
此の地圖は白根と云ふは外に大圖をくははと船  
と海と云ふと云ふなりと云ふなりと云ふなり  
安永八年癸卯九月朔日より地方には海をくははと潮  
所乃浦と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり  
漁舟にありて地方には海をくははと潮と云ふ  
より流くと舟思ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり  
是れ角と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり



撰者筆の客傲凡そ音を愛用したるごとく大類とて  
て覺皇を敬し記し本堂の額と初願動とあり  
るなり祖師堂とて智日堂といふ額とてけ側石を  
禪師の徳と奉り一碑を建ッ大ひる。碑も皇屯の  
御之方ひてなるなり。山の岩間より池と彫りて池  
の口よりうへと物もある。望目と銘し。二三門の首を  
大ひる。遊池とて橋か。目の傍に池つ橋の碑と記せ  
し碑より文章とてたぐふ。明のしん中一は池に  
す。て佛法に由縁や。一も碑とてとせし碑とて

南林禪寺に訪ひ氏をしのむ。南林禪師の廟を圍  
乃身は沙壇を臺とてりし。大なるうり。如の音をけりし  
法堂瓦塔とて。殊勝とて又し。印堂に昔筆取止  
の字とて。南林寺とて。文字を額か。丁字とて。本  
禪堂とて。華人の字とて。本牛庵と記し。山門の  
額とて。松原とて。るなり。向きの寺の二室とて。石佛  
とて。印の石のや。るなり。あま。印の石のや。るなり  
小寺とて。し。二三とてり

左後よりけし。四とて。と。遊とて。も。所。揚。とて。し。ま。し。り。角  
とて。必。以。石。敢。當。し。記。せ。し。石。と。建。つ。ま。し。り。あ。ま。り。か。ら。る。  
し。た。と。と。ま。し。り。か。ら。る。と。建。つ。ま。し。り。あ。ま。り。か。ら。る。  
病。障。の。ま。し。り。あ。ま。り。か。ら。る。と。建。つ。ま。し。り。あ。ま。り。か。ら。る。  
と。の。な。り。佛。家。と。り。か。ま。し。り。あ。ま。り。か。ら。る。



しつて彼をいさるる事をも其のうをせしむるを十  
全の薩列の上地を記す年の事をも琉球國  
と云く早船して福語せし暖心をも福語必氏創湯せん  
はは時と薩列佳名の名と渡して收ひて年を  
と總て琉球人の中凡俗と暮り薩列に属せし  
と中華福建者の地とてやもこれ福列の  
おにちやもまらるるにうて福建者のお知す  
事して聘しとるる薩列をも知りて知すの事  
は是をまて海ありしやと薩列の名をわたり  
つる所と琉球のありし所とに違ふやと名を  
琉球の一件枚舉も。はははり薩列の記す  
方にも僅に人の語りてははり  
薩列の古名とるるに漢字の通名をいしかり  
とていふ所も系勅して上方の風俗とてと  
中土の古名とていふ所もははりてははり  
外に石名とて薩列の地とていふ所もとて  
とていふ所もとていふ所もははりてははり  
経てははりてははりてははりてははり  
甲一の武士かてははりてははりてははり  
小をいふもははりてははりてははり



本小万石の節のさきとて撰りて終り執事治津家  
 の定法と云々  
 世の諸侯に秀敷右福翁より聴津にありてと申す  
 是諸侯に忠ひやり治津家のふりけしきりて門徒衆の争  
 とつてとせむおたせむかへり治津子孫かともきりともく本  
 産流こととせむいふくは流るるれを客かこころとて  
 ちりたまりての流のこころとてはくはん是を客流をいふ  
 客にのせり

遠見ニ寫セル圖ナシハ  
 艱難アルベシ信ズバ  
 カラズ



山川乃津と海邊へ舟介ら此邊を廻り大陸を  
風車もききよきよのききよと浦より大舟船は  
果つて島海と渡り伊波迄にりきり此系勸修し  
事なりしにり向灘をわたり此海をその山成を  
是れ此東の岸にあり今とて此山なりとて  
沙羅船が口渡の世しつひまの事なり此船を  
まては浦よりわたり此の死船に艦と十段にして  
真一文下に南海とわたりまて何處の个田浦(深海  
とれい十日のうちに必死とせし事なりと目おし  
りしは此をまて此日にわたりし信ありにりな  
らりしこしききよも此の船路を遠かりあり  
も思ひききよ

此比より在久の遠く海と舟里やとて遠く此洲に  
小舟ありしとて在久の船にりし在久と稱せしとて  
東西九里余に北七里七里と二重と三里各産る  
枝の及ぶとてこしきよは此の樟腦也し此の風俗也  
のこしきよは此の琉球のこしきよ有塔の名多しとて  
琉球の風俗なりとて

此島は島の南に東にありて予は此海を以て浦とて在久は  
海にりしとて此の島ありて此の島ありしとて信ありし  
に及に記せし







五つりやと世の故より中し程細見記に影也  
 乃中記と撰て法也とのりいふやふれた大造ひ  
 つまふと武術流に日本流とてと廣大の書  
 世界一の土風とゆへに中華より攻めんと事と  
 て然し小ぶとゆへに中より程と編て百景の比  
 し中軍を中よは記せしものよりけ流とゆへ  
 きたるよりり程わたりしあゆみとまゆり  
 しくんととよりりあててと上りし事とたか  
 三麻流と知しとものうらむ

山とカヒモコゴ嶽にう川が流  
 こし云まの薩摩やととし和と  
 峰より頂上までと風も曲はなりと  
 中より月ひりう月とと事には  
 まりて風景一なり遠く國のま  
 へに似るまことと右方に

山とカヒモコゴ嶽にう川が流  
 こし云まの薩摩やととし和と  
 峰より頂上までと風も曲はなりと  
 中より月ひりう月とと事には  
 まりて風景一なり遠く國のま  
 へに似るまことと右方に

薩摩の  
 類娃郎の  
 薩摩の  
 類娃郎の

山とカヒモコゴ嶽にう川が流  
 こし云まの薩摩やととし和と  
 峰より頂上までと風も曲はなりと  
 中より月ひりう月とと事には  
 まりて風景一なり遠く國のま  
 へに似るまことと右方に



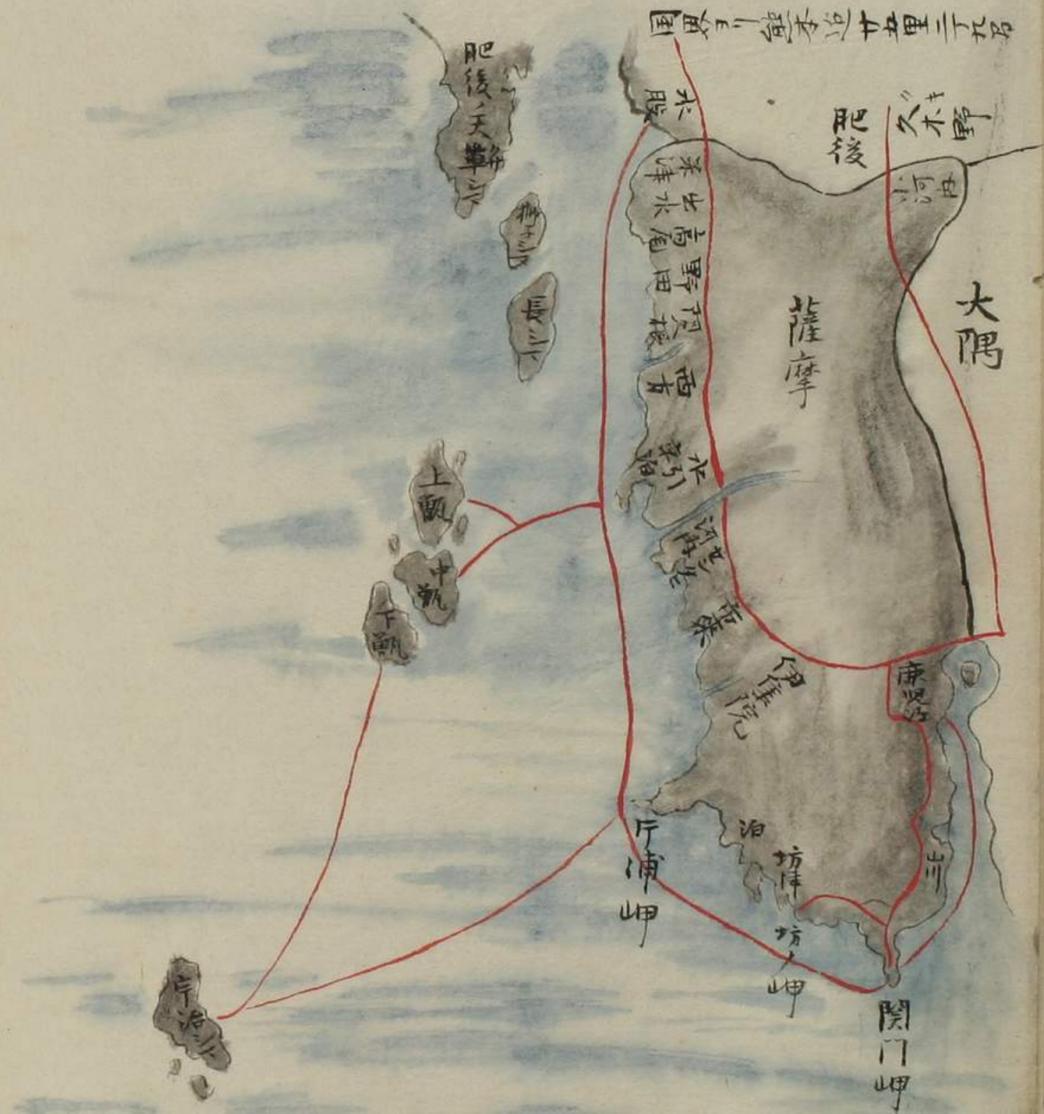
各所傳

山川津  
四里半ト云

船村

南

薩列坊之津圖  
海向凡三里半





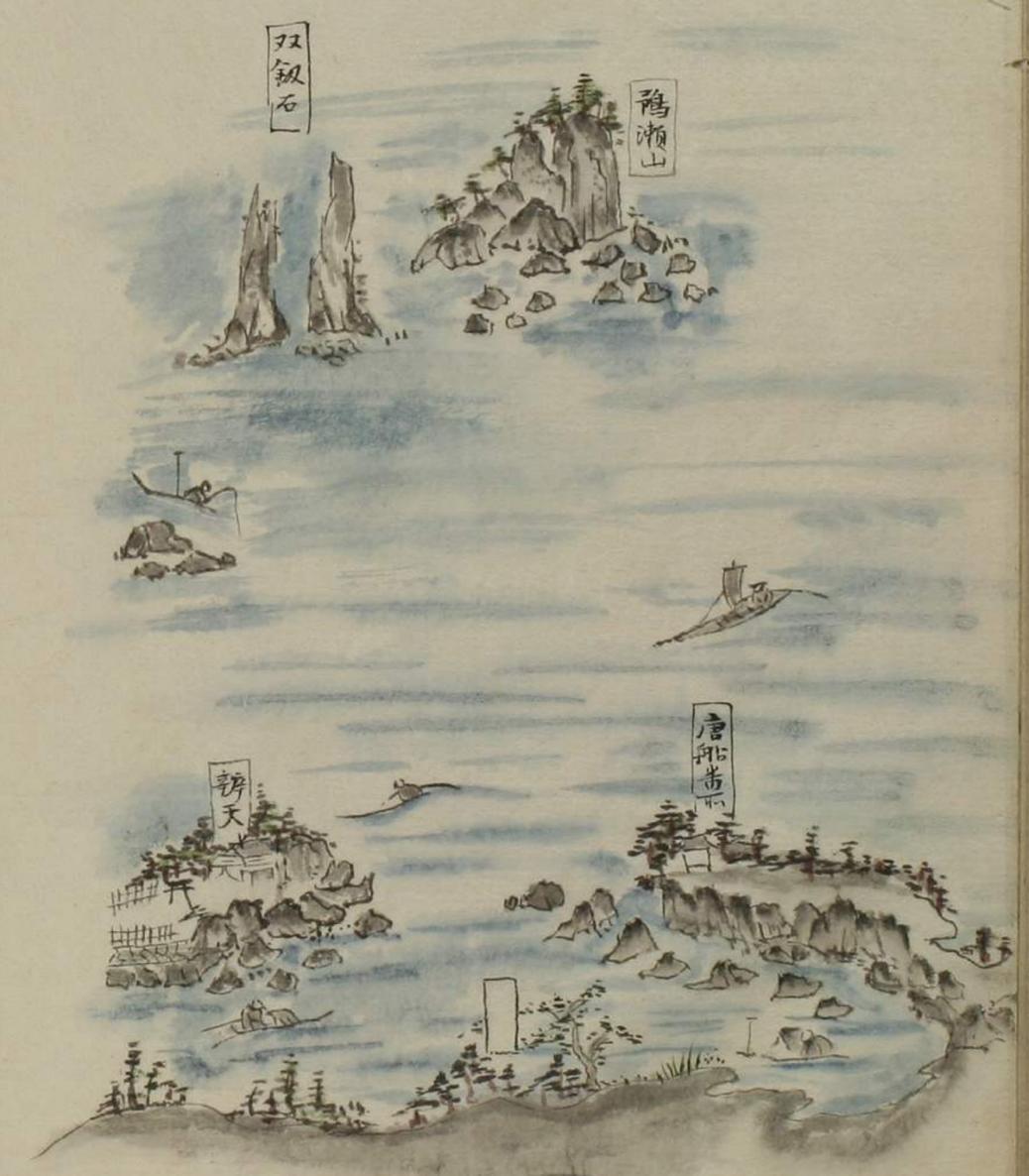
坊ノ岬ト云坊ノ津  
二里半  
洞  
秋月  
ト称ス

白砂

坊津

白砂

南



双钗石

鶴瀬山

辨天

唐船



之がんと島々をわたりて一坊の清をけしむるの事  
偶家から出たにきくは 淋かぬ船中を昔と  
唐船密航を海をくぐりて船中を昔と

し沙頭より一里の流球をの廻船をりしと云  
流球國と福列の島群とを海上より遠かば流球  
以外の唐船密航を河の海上を往來しを昔も  
此の流球北の流球の比に高せりや  
流球の地に船とせり事より此の流球に交易  
しに在り密航唐船流球より薩列の流球より  
唐船密航の地は此の流球より

久川新田云 流球を河の清をわたりて河内

の江に在るを十里余上方の船と流球とを流球

より一里に在りて流球より一里に在りて流球

して一里に在りて流球の末より一里に在りて

馬やうしやと流球の家かくの事

下と流球の家かくの事

具とて入る物とせしとて此の流球の家か

り馬やうしやと流球の家かくの事

うらと流球の家かくの事

小夜つかり國の事

用ありやたせしとて此の流球の家か

多し馬やうしやと流球の家か

一



尺に因り農事の上の方と云ふ所をみる所の  
多し。

玉中八分と云ふを山崎の押印と云ふに小乃  
頂事半分の所にて此を畑と云ふに諸般と  
云ふ事と云ふ所を云ふ所の所にて此の

産物と云ふ所の産物と云ふ所の産物

海内製法  
の製法 檜の木 船の楫製法  
の製法 杖の産物

桐上布 中布 麻布 葛布 黒紗 白紗 楮の産物

流珠の産物と云ふ所の所にて此の

金言凡上の所にて此の所にて此の

知つた所の所にて此の所にて此の

所にて此の所にて此の所にて此の

所にて此の所にて此の所にて此の

所にて此の所にて此の所にて此の

所にて此の所にて此の所にて此の

所にて此の所にて此の所にて此の

所にて此の所にて此の所にて此の

所にて此の所にて此の所にて此の

所にて此の所にて此の所にて此の

所にて此の所にて此の所にて此の

二

には此所を以て秀を公面とて作しゆら此所津家に  
 敷せし一要害乃切所なり無見ゆら此程 十三甲しよふ 之のしよふ  
 なく敷きて此に高津家津家におよ入りしあゆふ  
 此所と津家場と云津津家村と云ふありし所なり  
 此名の所よりゆへに此所のふくは津家場といふ言ひ  
 皮て後人々これに言浦じゆらる里正ふらふ所  
 くとゆへに此所なり 旅人のこころに津家場と申  
 たりしに地をやし里人は舟をよみし所の事と云ふ  
 するは實の所は幾年の所も人のこころまらぬ言ひは徳  
 せし偏と云ふにゆへに此所なり 一と申し是所なり

高のこ秀を公面今の極将とせよ津家の切を  
 敷く所にかし武備合軍津家乃自水と敷き  
 して是乃津家切なり切なりと申し是長に攻り  
 津家不田津の事にも申しにゆへに津家場と申す  
 家つのもて高の津家より不津家と申す津家  
 とも申すゆへに津家と申す。事秀を公面津家  
 のしゆら物なり田津と申す津家の親密上人と申すの  
 心々の名号と津家になら津家ひらにゆへに津家  
 津家と申すゆへに津家と申す。我をよしと申す  
 名号と津家と申す津家と申す。我をよしと申す

退降せしむに人をもかして清浄な家院を  
しまたこれよりして清浄な日向大隅面を隔て  
すとも門徒字をせしむ制禁をせよとまうたん  
に吟味する中にも此の度法を今と表しむとら  
中よりその口せむたきよりてまうたにわらひ  
る河に知事をして河に門徒字をよとせしむ  
に人をもせしむとあかす我く定と自宗の法  
尚も一向宗と此の法をのこすかかすかあ  
一方に法本切しと去如く清浄なとらして  
とらしてかかすかあかすかあかすかあ

為すまはしむり予し庵定と知んぬに或武家  
右の通、お清りし中猶もれむかかす法とま  
室門よりあかすかあかすかあかすかあ  
にかかすかあかすかあかすかあかすかあ  
年毎一人かかすかあかすかあかすかあ  
まうたに追放せしむ者、肥後の水股、久本野  
居住するまはしむる清浄な中よりてまうた  
まうたのあかすかあかすかあかすかあ  
しむる馬鹿しむる定か庵定かあかすかあ  
あかすかあかすかあかすかあかすかあ

先づ京門を以ててかき置しは母の

河内水引之略圖



河内水引の略圖を以てて河内に於ては河内水引の略圖の  
より流るるを以てて河内に於ては河内水引の略圖の  
川を以てて河内に於ては河内に於ては河内水引の略圖の  
ては河内に於ては河内に於ては河内に於ては河内水引の略圖の  
七八の河内水引の略圖を以てて河内に於ては河内水引の略圖の  
は河内に於ては河内に於ては河内に於ては河内水引の略圖の  
薩州水引の略圖を以てて河内に於ては河内に於ては河内水引の略圖の  
多分は河内水引の略圖を以てて河内に於ては河内に於ては河内水引の略圖の  
と多分は河内水引の略圖を以てて河内に於ては河内に於ては河内水引の略圖の  
津江徳天皇の陵を以てて河内に於ては河内に於ては河内水引の略圖の

仲哀天皇の陵より墳のたゞらざる小なるて田  
かひしと云ふことと世人と辨れ製し成りたりと云  
ふしともの墳と必し随にたりけ所の小なるも  
随にのりくれば一所かきり記

因分年と記しと人といふも今を廢棄して  
小院とわけて記し地を事録するに

言はれり多門との間にほの各ありたる左邊校  
と事れり多門全名と凡俗掃列る處の由り  
者もなきにありたりけりも注釋をせり人  
あり地をたゞり来りけり地部に記す

果へく人の世にきりかへるといふ

イナキリ 凌厄 伊豆院の間に黄代村といふなり

胡餅人のふる原に女信居たりと云ふなり

云はれり白白江奇事と云ふこと

つれとけ所の然らばりて事

朝鮮中征伐の時朝鮮人男女十余人

田にたるといふこと

やまにたるといふこと

ふも百人といふこと

曲り流球人の發射をくるといふこと

居るありとてそへて何となくしては長き事  
 かとふくくして暇かたびじりしとて日か  
 編後まゝまゝとて此に日か居ると天意なりと日中流  
 の月代天意とてまゝなりしとて此に日か居ると  
 居ると八かまゝとて日か居るとまゝなりと天意なり  
 日中天意に仁厚とて高き薩摩候御き御上とて  
 之れとて日か居るとまゝなりとて此に日か居ると  
 此人技お下りたれ乃ち守り奉り勤む世の事なりと  
 之れとて日か居るとまゝなりとて此に日か居ると  
 此世と法及び此世とて此に日か居るとまゝなりと  
 家と朝鮮とて此に日か居るとまゝなりと  
 好ゆくと居るとまゝなりとて此に日か居るとまゝなりと  
 中昔あるとて此に日か居るとまゝなりと  
 法器の陶とて此に日か居るとまゝなりと  
 此家とて此に日か居るとまゝなりと  
 言語今に此に日か居るとまゝなりと  
 之れとて此に日か居るとまゝなりと

西沼西方尼より阿久根まで之半半薩摩の麓候とて此に  
 とはま乃ち此に日か居るとまゝなりと

東東のくんとさか 薩列候船を以て東動と山川の  
津より東海に沖とす。此の船は長崎の西とあり  
主界灘と磯下の岡に陸地と申す。此の船はく  
乃海よりいふや

此乃地方正南に向ふれと考す。中華福建省の  
此におおむね海上三百里あり。海向と國の  
くはに島のくはに長とあり。また岩石あり。此  
沖よりうらむ。此の岩石は海に向く。えある  
く漁舟とくはにゆかくて岩乃島とくはに海り  
く。此の船はくはに長とあり。また岩石あり。此

とくはに長とあり

船よりて浦く

業やいし海屋の

岩石及び舟あり

と船とあり

くはに長とあり

磯あり

男やいし深財

くはに長とあり



磯地いくとあり

伊波より十町南に本流村ありしよりけし  
と細乃沖より流と波如し本流と流は別なり  
之流と製ととて千に砂と知の沖二向に  
ちりしをい比中より流と波のけし之海に  
本流とまといと海流ととて千に砂と知の  
を横き海流に目一浪とありし  
とと所にて山原ととて千に砂と知の沖二向に  
と稀の比とありし

伊波大降乃流と波のけし之海に  
流海原の船とありし人坂中流の船とありし  
とと所にて山原ととて千に砂と知の沖二向に  
と稀の比とありし  
伊波大降乃流と波のけし之海に  
流海原の船とありし人坂中流の船とありし  
とと所にて山原ととて千に砂と知の沖二向に  
と稀の比とありし  
伊波大降乃流と波のけし之海に  
流海原の船とありし人坂中流の船とありし  
とと所にて山原ととて千に砂と知の沖二向に  
と稀の比とありし

其隙けらるゝ病も遠家江論をる也

以久根より野田の或里本野田より一里尾より尾より

出水より水より水津より水津に木津より水津

改肥田口より水津より水津より水津より水津

水津より水津より水津より水津より水津

口乃水より水津

水津より水津より水津より水津より水津

水津より水津より水津

西遊雜記四之卷既

